

# 横浜中華街関帝廟参拝体験記

国際日本学部 国際文化交流学科 中林広一  
 国際日本学部 国際文化交流学科2年 今井颯希・遠藤紗夕希

## ○関帝廟について

国際日本学部国際文化交流学科は4つのコースから成り立っており、それぞれのコースでは2年次に演習系の科目である「コース演習Ⅰ・Ⅱ」を配当している。カリキュラム上、学生は3年次のゼミナールにて自身の関心に沿った本格的な学修を行うが、本科目はその前段階として必要とされるトレーニングを行う科目として位置付けられている。コース演習の内容はコースごとに異なっているが、筆者（中林）の所属する文化交流コースではプログラムの一部に校外学習を組み込んでいくところに特徴がある。

この校外学習において学生は複数の施設の中から関心のあるものを選択して校外学習に参加する。異文化理解や多文化共生といった本コースのテーマを踏まえつつ、担当教員の専門に関連する施設が設定されているが、筆者は例年横浜中華街にある関帝廟を訪れることにしている。この関帝廟について施設見学に参加した学生がその概要をまとめてくれたので、以下紹介を行ってみたい。

150年の歴史を持つ横浜関帝廟は、三国志で有名な將軍、関聖帝君を祀る中国の道教の寺院である。道教は古来中国の民間に信じられていた、仙人や不老不死を信じる神仙思想、道家思想、呪術が仏教の影響を受けて魏晋南北朝時代に成立した宗教である。信仰がこの世で実るとされる現世利益的な宗教で、老子と荘子が説いた無為をもって教義の極地とする老荘思想や医術、まじないなどを取り入れて自らが仙人となることを願うものである。日本にも神社のお守りやお札、桃の節句、端午の節句、七五三などの大きな影響を与えている。

横浜関帝廟の歴史は鎖国の終わりとともに始まった。1859年、ペリーの来航によって横浜港が開港し、それに伴い多くの中国人が現在の山下町に移住してきた。1862年に彼らの手によって中華街の裏通りに関聖帝君を祀る小さな祠が建てられ、1871年には関東に居住していた華僑らの寄付により、中国様式の関帝廟が建設された。関東大震災や第二次世界大戦中の横浜大空

襲、原因不明の火災などといった厄災に何度も見舞われながらも、多くの人々の協力や募金などによって、1990年8月14日に現在の四代目関帝廟が開廟した。四代目関帝廟は中国本土出身の建築士を呼び集め、建築資材や装飾の多くも中国から輸入されたものを使用している。また、場所も中華街の裏通りから、誰でも気軽に訪れられる現在の場所へと移された。

関帝廟に祀られている神様は、全部で5柱である。国泰平安を司る玉皇上帝はすべての神の君主とされている。中国の神話によれば、昔、光厳妙楽国という国を治めていた浄徳王という王様がいた。彼には宝月光という妃がいたが、まったく子宝に恵まれず、道士を呼んでは祈禱を行っていた。ある晩、宝月光は夢の中で神から赤子を受け取った。その翌朝身籠っていることが発覚し、そうして生まれたのが後に玉皇上帝となる張堅であった。先帝の死後王位を継いだ張堅は、しかしすぐに大臣に王位を譲り、非常に長い時間山中で修業を重ね、やがて玉皇上帝になったとされている。主神として祀られているのは、商売繁盛と入試合格を司る関聖帝君である。関羽と言えれば聞き馴染

みのある人も多いだろう。三国志時代に蜀を建国した劉備と義兄弟の契りを交わし、死ぬまで忠義を果たした武将である。その生き様は後に義理を重んじる商売人から信仰されるようになり、やがて商売の神様として祀られるようになった。他にも、健康と除災を司る地母娘娘、解難と健康、縁談と安産を司る観音菩薩、金運と財産保全を司る福德正神が祀られている。(今井 颯希)

## ○参拝方法について

閩帝廟は日本のお寺や神社とはお参りの方法が異なる。まず、神殿内で参拝をする前に、身をお清めするという意味を込めて線香をお供えする。このとき、決められた順番に従い、5人の神様に1本ずつ線香をお供えしていくが、それぞれの神様のご利益は非常に多彩である。1番目に線香をお供えする神様は、中国道教の最高神である玉皇上帝であり、国泰平安を願う。次いで、閩聖帝君には商売繁盛と入試合格、家内安全と学問を願ひ、地母娘娘には健康と除災を願ひ、観音菩薩には解難と健康、縁談と安産を願ひ、福德正神には金運と財産保全を願う。ここでお供えする線香は日本でよく見かける細く短い束状のものとは異なり、長く太いのが特徴的である。また中心には竹が用いられており、燃え尽きるまでに1時間半ほどかかるそうだ。

その後、神殿に入り玉皇上帝、閩聖帝君、地母

娘娘、観音菩薩、福德正神の順に礼拝台にひざまづき、3回お辞儀をする。この際、心の中で自身の住所、氏名、生年月日を告げ、最後に具体的な願い事をする。日本では御祈禱の場面でもない限り、個人情報を示すことは滅多にない。しかし、道教の神様は具体的な願い事を叶えてくれるため、誰がどこでその願いをしているのが神様にわかるように、明白に自己紹介をしなければならぬ。

## ○おみくじについて

閩帝廟では「神筭式」という中国式のおみくじを引くことができる。まず、おみくじ棒が入った器である「籤桶」を持ち、自身の住所、氏名、生年月日と具体的な願い事を心の中で告げながら、自然におみくじ棒が1本出てくるまで振る。日本のおみくじの場合、ここで抜き取った番号のおみくじと交換したらおしまいになるが、神筭式の場合はまだ続きがある。

今度は先ほど取り出したおみくじの番号が本当に正しいのか、ということを神様に尋ねる。その際に、「神筭」という三日月形の神具を土間に2つ落とし、表と裏が出れば、その番号のおみくじを受け取ることができる。もし、表と表、裏と裏が出た場合は最初のおみくじ棒を引くところからやり直し、表と裏が出るまで繰り返す。3回繰り返しても表と裏が出ない場合は、後日改めて行う

のが望ましいそうだ。

閩帝廟のおみくじの種類には、大吉、上吉、上上、中吉、中平、下下の6種類がある。日本の神社では、おみくじの結果が悪い場合、おみくじ掛などに結びつけることがほとんどである。しかし、閩帝廟ではおみくじの結果が悪いときや納得できない場合は、境内の炉でおみくじを燃やすことができる。日本ではおみくじをいつでも気軽に引くが、中国ではそうした習慣がなく、深刻な悩みなどがある場合におみくじを引くそうである。

(遠藤 紗夕希)

閩帝廟に関する情報は以上となる。これらの内容が示すように、閩帝廟での参拝方法は私たちになじみの深い神社や寺院でのそれとは大きく異なっている。拝礼に当たっては自身の個人情報に神に具体的に示す必要があり、また願い事がある場合も、その内容は極力具体的であることが求められる。これは道教の持つ現世利益の性格と深く関係するが、このように私たちのよく知る宗教とは異なった宗教について触れる経験は、学生にとって意義のあるものだと言えよう。と言うのも、こうした機会は学生の感覚・価値観の相対化を促すものであり、異文化理解・多文化共生という本コースのテーマに適した機会であるからである。

今後の日本社会は国外から多様な文化的・社会的バックボーンを持った人々を受け入れることに

なるものと想定されている。それが留学生であ  
れ、あるいは観光客や移民であれ、こうした異なっ  
た文化・言語をバックボーンとした人々と相対し  
つつ、社会を維持していくためには異文化の論理・  
価値観を把握することが求められよう。また、こ  
れらの人々との間で円滑なコミュニケーションを  
成立させ、多文化共生社会を作り上げるための努  
力も必要とされるものと考えられる。ともあれ、  
今回のような機会は学生にとつてそうした意味で  
も良い契機になったと考えられる。（中林）

#### 参考文献・サイト

- 木畑洋一・松本宣郎ほか『世界史B 新訂版』  
実教出版、2020年
- 全国歴史教育研究協議会『改訂版 世界史用語  
集』山川出版社、2018年
- 浜島書店編集部『アカデミア世界史』浜島書店、  
2009年
- 山崎圭一『一度読んだら絶対に忘れない世界史  
人物事典』SBクリエイティブ株式会社、  
2021年
- 横浜関帝廟公式サイト  
<https://yokohama-kanteiyo.com/>
- 関帝廟  
<https://yokohama-kanteiyo.com/kuan-ti-miao/>
- 関聖帝君  
<https://yokohama-kanteiyo.com/holy-emperor-lord-guan-yu/>

#### 「参拝」

- <https://yokohama-kanteiyo.com/pray/>
- 台湾さんぽ「お参りの仕方（拝む）」  
<https://www.taiwansanpo.com/paipai-p032/>

#### ● Icotto 心みさるたび

- <https://icotto.jp/presses/5794>



香炉に線香を供える